

一部分は宿業によつて決定せられてゐるが、他方において、我々の自由意志にゆだねられてゐる部分もある。この點において、我々は或る範圍において運命を開拓し得る自由を有してゐるわけである。

従つて我々の業は、その意味において自由であり、有意義である。後世、佛教一般において考へられて來た宿業説は、恐らくこのやうな形のものであつたのであらう。

四、親鸞聖人の宿業觀として、歎異鈔の第十三章をとり擧げるとき、そこに見られるものは、佛教一般の宿業論から見ても、極めて特異なものである。即ち、

1、從來の宿業説は、我々がこの世において受ける苦・樂の果報が宿業の結果であることを説くのみであつて、我々の業までも宿業によると説くことはなかつた。所謂「因是善惡、果は無記」(異熟因、異熟果)で、この果は異熟無記たる果報を意味してゐた。歎異鈔の宿業觀では、「因是善惡、果是善惡」(同類因、等流果)であつて、従つてこの果は、嚴密な意味では、果報(及ち異熟)ではない。

2、佛教の根本思想は「無我」を説く

所にあるが、この無我説が最も徹底した形で説かれたのが、親鸞聖人の「絕對他力」といふことである。歎異鈔の宿業觀は、この「絕對他力」の一つの表はれと見ることが出来る。その意味において、歎異鈔では、業論が佛教の中心思想を表明するものとなつてゐるが、親鸞聖人以前の佛教では、業論の本旨は勸善懲惡の人天乘を説く所にあつて、佛教の中心思想からは幾らか離れてゐる。

3、親鸞聖人以前の宿業説は、第三者の立場から事實を説明解釋するものであつたが、歎異鈔の宿業觀は、如來の本願の光に照らし出された罪業のわが身を省みての懺悔の表白である。

4、親鸞聖人の宿業觀に對する、佛教の業論の上における根據は、無表業説の上にこれを求めることができる。

佛教の中國的發展

道端 良秀

問題は印度佛教が中國に流傳されて、どのようにして中國佛教として展開した

か、と云うことである。即ち氣候風土、習俗慣習の異つた中國の國土に在つて、佛教がどのようにして流布されたか、漢學と云う古典の素養を身につけ、禮を尊び、孝を最高道德とする儒教の社會に對して、佛教はどうしてこれに對應したであらうか、と云うことである。と云うのは、佛教はこの社會とは凡そ反對であつたからである。人世の否定を説き、空苦無常無我を説く教であり、出來して道を求め、解説して涅槃の證を得る教であるからである。

世界觀、人生觀の異なつた、二つの異質の文化が、どのように調和し融合して印度的佛教が、中國の佛教となつて行つたかと言ふことである。佛教が印度の佛教から、中國人の佛教として展開して行つた経路を眺めたい、と云うのが、この小論のねらいである。

第一にどうして佛教が中國民衆に受け入れられたかに對しては先ず佛教が中國的なものとして、神仙的佛教となり、方術、呪術的な佛教として、これが説かれ受け入れられたことである。従つて初期の佛教は、少くとも道教的佛教であり、

神仙的佛教であつた。又一方には儒教的な佛教でもあつた。

又佛教側が如何にして中國社會に佛教を普及せしめようとして苦心したか、その第一としては、格義の佛教である。佛教の思想を老莊思想に比して、老莊の文字を借りてこれを説明せんとしたことである。無、玄、道などその一つである。

又佛教を中國的に普及せしめんとした結果が、經典の新たな作成である。所謂偽經と言われるものがこれで、古い目錄である出三藏記集に既に偽經部が設けられ多くの偽經經典が載せられている。

已下隋唐の目錄の偽經部の經典は次第に増加して、開元錄には疑惑再詳錄に一部一九卷、僞妄亂眞錄に三九二部一〇五五卷を出している。この偽經の検討こそ中國佛教の特質と言わるべきものであらう。

特に孝を中心とした父母恩重經は、儒教の孝に對して佛教の積極的な孝經典であり、又提謂波利經は北魏に作成された五戒を中心とする在家經典で、佛教の五戒を儒教の五常に配合し調和せしめたものである。この二經典は特に中國佛教に

取つて重要視されたことは、佛教の大家が例へば天台や吉藏(或は法期、契嵩が提謂經を、宗密が父母恩重經を、恐らく偽經と知りつつこれを引用して、これを強調していることに於いて知ることが出来る。一は佛教儒教の家族倫理の問題であり、一は五戒五常の社會倫理の問題である。禮の世界から戒の世界にどうして入らしめるかと言う一つの大きな問題であつたのである。しかもこの孝と五戒五常との問題は、中國佛教史を通じて、色々な事件と問題とを提供しているものである。

新刊紹介

文學博士 水野弘元著

『パーリ語文法』

(I) 出版の意義 わが國におけるパーリ語學研究は、嘗て立花俊道博士による『巴利語文法』に先鞭づけられて以來、

既に四十年の歴史を経てきた。その間、長井眞琴博士の『獨習巴里語文法』が約二十五年以前に出版されたのであるが、こ

の兩書を指針として、爾來、斯學に關する學的成果はまことに顯著なものがあつたのである。ところで、今日の段階からすれば、新しく開かれた歴史の窓を通し、廣汎な學の基盤に立脚したパーリ語文法の出版こそ、蓋し、期して久しく待たれたものの一つである。この要請に應えて現在、わが國パーリ語學界の第一人者であられる博士が、その該博な研究領野から樹立された金字塔こそ、まさしく本書であると言えよう。

(II) 本書の内容目次 この書は、I

序論(pp. 1~27) II 音韻論(pp. 28~63)

III 語形論(pp. 64~144) IV 造語法(pp. 145~157) V 文章論(pp. 158~189) を主

文とし、別に附録 I (pp. 190~220) の中に、パーリ語・パーリ佛教の歴史を、附録 II (pp. 221~246) の中に、パーリ關係の重要な參考文獻を網羅し、更に文法的索引(pp. 247~317) 固有名詞・件名

索引(pp. 318~333) 等の Index を附している。その尨大な量は、從來のパーリ文法書と比較されるものでないことは勿論、從來の、この種の文法書に見られない近縁語との關係に深く留意して筆を進